

第二十六章 豊かな国と貧しい国における金、穀物、労働の相対価値

労働の相対価値

アダム・スミスは「金銀は他のあらゆる商品と同様に、最も高値が付く市場へ自然に流れ、通常、あらゆる物に最高値が支払われるのは、支払い能力の高い国である。忘れてはならないが、万物に対して最終的に支払われる対価は労働であり、労働が同程度に報いられる国々では、貨幣賃金は労働者の生計費に比例する。さらに、金銀は、貧しい国よりも豊かな国で、また生活必需品が豊富な国のほうが不足している国よりも、より多くの生活必需品と交換される」と述べる。

しかし、穀物は金銀と同様に一般の商品であり、もし富国であらゆる商品の交換価値が高いのなら穀物だけを例外にはできない。そうになると、穀物が高いから多くの貨幣と交換され、同時に貨幣の価値も高いから一定量の貨幣で多くの穀物が手に入るという矛盾に陥ることになり、結局は穀物が同時に高くも安くもあると言うに等しい。政治経済

学で確立した命題の一つに、富国では食料の確保が次第に難しくなるため貧国と同じ比率では人口を増やせず、この困難が食料の相対価格を押し上げて輸入を促す、というものがある。それなのに、なぜ富国のほうが貧国よりも、貨幣（すなわち金銀）でより多くの穀物と交換できると言えるのか。むしろ、穀物が高値である富国でこそ、地主が立法府を動かして穀物輸入の禁止を成立させる。米国やポーランドで一次産品の輸入を禁じる法律を耳にしたことがあるだろうか。これらの国では生産が相対的に容易で、自然が実質的にその輸入を退けている。

では、この主張は本当に成り立つのか。「穀物と、人間の労働だけで栽培されるその他の野菜を除けば、家畜や家禽、狩猟対象の獣、地中の有用な化石燃料や鉱物といった一次産品は、社会の進歩と発達に伴い自然と値上がりする」。なぜ穀物と野菜だけを例外とするのか。スミス博士の誤りは、著作全体を通じて穀物の価値は一定だと仮定している点にある。他の財の価値が上がっても穀物だけは上がり得ないとする。穀物は常に同じ人数を養えるから価値は変わらないというが、同じ理屈で言えば布も常に同じ枚数の上着を作れるのだから価値は常に同じだと言える。人を養い衣服を供する能力と価値は、そもそもどう関係するのか。

穀物にも他の商品と同じく国ごとに自然価格があり、それは生産維持に不可欠な下限として市場価格を支配し、輸出の妥当性を左右する。仮にイングランドが穀物の輸入を禁止すれば、同国の自然価格は一クォーター当たり六ポンドまで上がり得る一方、フランスではその半額にすぎない。禁輸を解けば、イングランドの市場価格は六ポンドと三ポンドの間ではなく、フランスの自然価格、すなわちフランスが通常の資本利潤を確保しつつイングランドへ供給できる水準まで下がって安定する。価格は、イングランドの消費量が一〇万クォーターでも一〇〇万クォーターでもこの水準にとどまる。ただし、需要が一〇〇万クォーターに達するなら、フランスは供給拡大のために生産性の低い土地の利用を余儀なくされ、その結果、同国の自然価格が上昇してイングランドの価格にも波及する。結局、独占でない限り、輸入国の販売価格を最終的に規定するのは輸出国の自然価格である。

スミス博士は、市場価格は最終的に自然価格に収束し、自然価格が結局は市場価格を規定するとみてこの理論を擁護してきたが、例外として市場価格が輸出国と輸入国の自然価格のいずれにも従わない局面があり得ることも認める。すなわち、オランダまたはジェノヴァ領で実質的な富がやせ細り、その人口は横ばいのままで、遠隔地や海外から

の調達力が弱まると、その衰退の原因または結果として必然的に伴う銀の保有量の減少があつても、穀物価格は下がらず、飢饉価格にまで上昇する、と述べる。

私には、むしろ逆の結果になると考えられる。オランダ人やジェノバ人の購買力が一般的に弱まれば、輸出国でも輸入国でも穀物価格は一時的に自然価格を下回るが、それによって穀物価格が自然価格を上回るのはまったくありえない。需要を増やし、穀物価格を従来の水準を上回るまで引き上げられるのは、オランダ人やジェノバ人の富を増やした場合に限られ、しかも供給の確保に新たな障害が生じないかぎり、そのような上昇はごく短期間にとどまる。

スミス博士はこの点について次のように述べた。必需品が欠乏すれば人は贅沢品を手放し、贅沢品の価値は富と繁栄の時代には上昇し、貧困と窮乏の時代には低下する。この指摘は疑いなく正しい。だが博士は続けて、必需品は事情が異なり、必需品の実質価格、すなわちそれによって雇用できる労働量は、貧困と窮乏の時代には上昇し、富と繁栄の時代には低下すると述べた。富と繁栄の時代は常に物資が豊富な時代であり、そうでなければ富でも繁栄でもない。穀物は必需品で、銀は単なる贅沢品だと結んだ。

ここでは互いに独立した二つの命題が示されている。第一に、想定条件下では穀物が

より多くの労働を雇えるという点については異論がない。第二に、穀物がより高い貨幣価格で売れ、より多くの銀と交換できるという主張があるが、これは誤りである。これは穀物が同時に不足して通常の供給が確保できない場合には成り立ち得るものの、今回の前提では穀物は潤沢であり、輸入が通常より少ないとも需要が増えたともされていない。穀物を買うためにオランダ人やジェノヴァ人は貨幣を用意する必要がある、その調達のために手持ちの余剰品を売却する。下落するのはその余剰品の市場価値と価格で、貨幣が相対的に高く見えるだけだ。しかし、これによって穀物の需要が強まるわけでも貨幣の価値が下がるわけでもない。穀物価格を押し上げる要因は、穀物の需要増加か貨幣の価値低下の二つに限られる。信用不安などで貨幣の需要が強まり、結果として穀物に比べ貨幣が相対的に高くなることはあり得るが、その局面で貨幣が割安だとする根拠はなく、したがって穀物価格が上がるとも言えない。

各国で金や銀など諸商品の価格が高いか安いかを論じるには、何を尺度として評価するのかを明らかにしなければ議論は成り立たない。したがって、「金はスペインよりイギリスで高い」と言うだけでは、何を基準に比較するのかを示さないかぎり意味は定まらない。もし小麦、オリーブ、油、ワイン、羊毛がイギリスよりスペインで安いなら、

それらを物差しにすれば金はスペインのほうが高い。逆に金属製品、砂糖、布がスペインよりイギリスで安いなら、それらを物差しにすれば金はイギリスのほうが高い。結局、金がスペインで高く見えるか安く見えるかは、観察者がどの価値尺度を選ぶかに左右される。アダム・スミスは穀物と労働を普遍的な価値尺度とみなし、金の相対価値はそれらと交換できる量で測るのが自然だと考えたから、二国間の金の相対価値に言及するときは、穀物と労働で評価した価値を指していると私は理解する。

金の価値を穀物で測れば国ごとに大きく異なる。私は富国では低く貧国では高いことを示そうとしたが、アダム・スミスはむしろ富国のほうが高いとみる。どちらの立場を採っても、鉱山を持つ国で金が必ずしも安いとは限らず、これは「鉱山国では金は低価値だ」とするスミス自身の命題と矛盾する。仮にイギリスが鉱山を持ちスミスの見立てが正しいとしても、金が諸国の商品と交換されて自然に流出することはあっても、穀物や労働に対する相対価格がイギリスで必ずしも低いとは限らない。他方スミスは別の箇所では、スペインやポルトガルのような鉱山国では、その産地たる鉱山をほぼ独占しているため、貴金属の価値は欧州の他地域より必ず低いと述べ、さらにその理由として、輸送費や保険に加え、禁輸や課税に伴う密輸費用が重なることを挙げる。さらに、封建制が

残るポーランドはアメリカ大陸発見以前と変わらず貧しいが、穀物の貨幣価格は上がり、欧州各地と同様に貴金属の実質価値は下がったため、土地と労働の年々の産出に対する貴金属量は他地域と同じように増えたはずだ。それでも製造業や農業は伸びず、住民の暮らし向きも改善していない。鉱山国のスペインとポルトガルはポーランドに次いで欧州でも貧しい部類に属し、土地と労働の年々の産出に比した貴金属量は欧州で最も多いはずなのに、なお多くの国より貧しい。スミスは、両国では封建制は廃止されたものの、より良い制度への移行はなお不十分だとも述べる。

スミス博士は、金を穀物に換算し、すなわち穀物基準で見れば、スペインにおける金の穀物換算価格は他国よりも低いと主張する。その根拠は、諸外国が金と引き換えに穀物をスペインに送っているからではなく、諸外国が金と交換してスペインに送っているのは穀物ではなく布、砂糖、金物であるという事実にある。